

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき
はるかに照らせ山の端の月



旅人⑦ **和泉式部**
(平安時代中期) 歌人

一条天皇の中宮彰子に仕えていた和泉式部は、彰子やほかの女房とともに性空上人を訪ねましたが、会っていただけませんでした。そこで、寺の柱に和歌を書いて立ち去ろうとしたところ、歌に感心した上人が呼び戻して丁寧に教えを垂れたという伝説があります。



▲書写山円教寺(摩尼殿)



▲書写山円教寺(大講堂)

巡礼道



▼廣峯神社



廣峯神社の創建は崇神天皇のころと伝えられ、奈良時代末期に吉備真備が唐から帰国した際、神託によって社殿を造営したといわれます。本殿と拝殿は国指定の重要無形文化財。古くから多くの信仰を集めています。

**牛頭天王の
総本宮である
廣峯神社**



性空上人が開いた
山上に広がる
円教寺

書写

康保3年(966)、性空上人によって開かれた円教寺。天禄元年(970)に現在の摩尼殿が建立され、寛和2年(986)、花山院が行幸された際には、円教寺の寺号を賜り大講堂が建てられました。西の比叡山と称され、史跡に指定されている境内には25件の指定文化財があります。

▼随願寺



増位
聖徳太子の命により
開かれた随願寺

随願寺は聖徳太子の命により高麗の僧・慧便が開基し、天平年間に行基が中興したもので、中世末期には山上に36坊が立ち並んでいました。天正元年(1573)、別所長治によって全山焼失しましたが、天正13年(1585)に羽柴(豊臣)秀吉が再興しました。姫路城主・榊原忠次墓所には、享保16年(1731)に建立された唐門をはじめ、本堂、開山堂、経堂、鐘楼があり、国の重要文化財に指定されています。

播磨路や糸の細道わけゆけば
砥堀に見ゆる有明の月



旅人⑧ **在原業平**
(825~880) 貴族・歌人

貞観17年(875)、随願寺に勅使として訪れていた在原業平は、滞在中に有明峯(増位山の東の峯)で歌を詠んだと伝えられます。「糸の細道」は、砥堀から有明山までの道を指していると考えられています。

網干

歴史と文化に
彩られた

網干の名は、魚吹八幡神社の放生会の日に漁師が殺生をやめ、網を干して参拝したことが由来といわれ、この魚吹八幡神社の門前の道が、室津道(北路)です。国重要文化財の釈迦三尊像と十六羅漢像を擁する大覚寺や、盤珪禅師とその弟子・田捨女にゆかりの龍門寺と不徹寺など数多くの文化財があります。



▲龍門寺

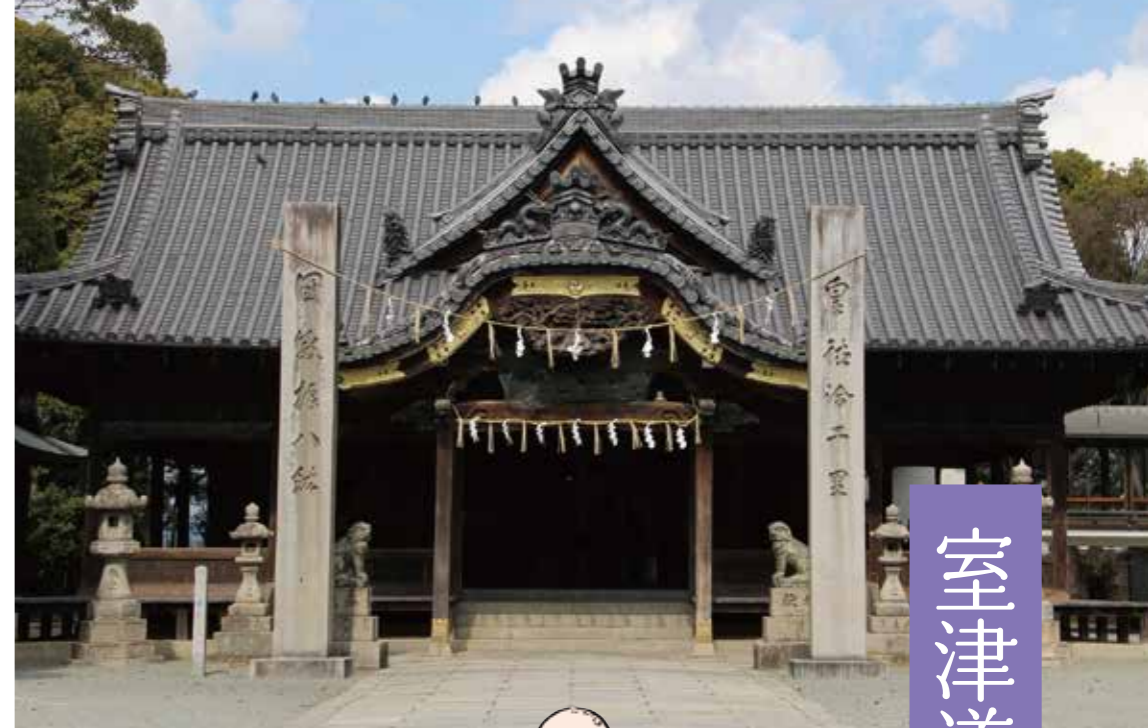
旅人⑥ **申維翰** 第9次朝鮮通信使製述官

室町時代に起源をもつ朝鮮通信使も室津に立ち寄りました。室津での朝鮮通信使の応接は姫路藩主の役割でした。第9次朝鮮通信使の申維翰は、ソウルと江戸を往復する約9カ月の旅の日記などを残しています。

西へ東へ。

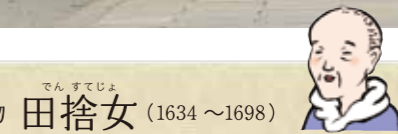
船旅や寺詣で

西国の参勤交代の大名が通った室津道や、関東からやってきた西国巡礼者が通った巡礼道など、江戸時代になると多くの人が姫路を訪れました。歴史ある寺社仏閣巡りを楽しんで。



▲魚吹八幡神社

室津道



網干ゆかりの人物 **田捨女** (1634~1698)

盤珪禅師の尼弟子の中で最も知られるのは丹波市柏原出身の田捨女。捨女は6歳のときに「雪の朝 二の字二の字の下駄の跡」という句を詠んだ俳人です。41歳で夫と死別すると浄土宗に入り、その後、盤珪の門下となって龍門寺の近くに不徹寺を開きました。



▼英賀城本丸跡



▲室津
江戸時代初期から明治に至るまで、姫路藩が治めた重要な港



▼英賀神社

英賀保
城下町・門前町として
栄えた

英賀城は嘉吉元年(1441)、三木通近が入城して以降、三木氏10代にわたる140年間、播磨地方における経済・文化・宗教の中心地となり、寺内町を構成して栄華を極めました。歴代城主は英賀神社を領内の総氏神としてあがめるとともに、明応2年(1493)には一族で浄土真宗に帰依。英賀本徳寺(英賀御坊)をはじめ多くの真宗寺院が建てられました。天正8年(1580)の羽柴(豊臣)秀吉の攻略により、英賀城は落城。城下町も火の海に包まれたと伝えられています。その後、本徳寺は亀山に移されました。



英賀本徳寺跡(明蓮寺)▶

